

ねんがつ にち
2024年2月25日

しじゅんせつだい しじゅつ
四旬節第2主日

きくち いさおだい しきょう
菊地 功大司教 メッセージ

イエスの福音宣教は、旅路です。イエスは、一定の成果を手にし、安心と安全を得た地にとどまり続けることをよしとせず、福音を告げるために旅を続けます。その旅は、常に挑戦に満ちあふれていますが、臆することなく、イエスは福音をあかしし続けます。

マルコ福音は、その旅路を歩むイエスが、三人の弟子たちの前で光り輝く姿に変容した出来事を伝えています。神の栄光を目の当たりにし、

「これは私の愛する子、これに聞け」という神の声を耳にしたペトロは、その栄光の輝きの中に留まり続けることを望み、仮小屋を三つ建てることを提案します。しかしイエスは歩み続けます。

本日の第一朗読である創世記は、神からの試練の内にあるアブラハムが、神への信頼のうちに理解不可能な未知の領域に歩みを進める姿を記しています。イサクを献げるようにと言う、神からのいわば無理な要求です。アブラハムは、今の安定に留まることなく、神に従って前進することを選びます。アブラハムの人生は、安定に留まらず、常に挑戦しながら旅を続ける人生でした。その生き方を、神は高く評価しました。

信仰は、わたしたちに常なる挑戦へと旅立つことを求めます。

四旬節にあたり教皇フランシスコは、「荒れ野を通り、神はわたしたちを解放へと導かれる」というタイトルのメッセージを発表されています。

メッセージの中で教皇は、わたしたちが回心の道を歩み続けることを、荒れ野を旅したイスラエルの民になぞらえ、「希望を失い、荒れ果てた地にいるように人生をさまよい、ともに向かっているはずの約束の地が見えないとき」、民は元の奴隷状態を懐かしみ、前進するよりも過去に縛られ続けようとしたことを指摘します。

おなじように、現代社会げんだいしゃかいに生いきているわたしたちも、「世界規模せかいきぼでの兄弟愛きょうだいあいの実現じつげんを目前もくぜんにしながら、科学かがく、技術ぎじゆつ、文化ぶんか、法制度ほうせいどが、万人ばんにんの尊厳そんげんを保証ほしょうしうる水準すいじゆんにまで発展はつてんしながら、格差かくさと紛争ふんそうの闇やみを進すすんでいること」の理由りゆうは、罪つみの状態じょうたいから解放かいほうされようとするよりも、「自由じゆうを犠牲ぎせいにしてまでも、なじんでいるものの安心感あんしんかんに惹ひかれる」わたしたちの弱よわさであり、他者たしやの叫さけびへの無関心むかんしんであると指摘してきされています。

その上うえで教皇きやうこうは、教会きやうかいのシノドスてき的な姿すがたを追求ついきゆうすることは、「四旬節しじゆんせつが共同体きやうどうたいでの決断けつだんの時ときでもあると示唆しさしてくれます。個々人こごじんの日常にちじやうを改あらため、地域ちいきの生活せいかつを変かえうる、今いまの流れながとは違ちがう選択せんたくを大小だいしやうさまざまに行おこなう時ときです。購買かうばいの意識化いしきか、被造物ひぞうぶつのケアしゃかい、社会むしから無視みされ見下みさげられている人ひとたちの受け入うれ、そうしたことを選択せんたくしていくのです」とのべています。

わたしたちは安住あんじゆうを求めもとめるのではなく、常つねに挑ちょう戦せんし続つづけながら前ぜん進しんを続つづける神かみの民たみです。希望きぼうが見みいだせないときにも、「奴隷どれい状態じやうたいから抜ぬけ出でる勇気ゆうき」をもつて、歩あゆみ続つづけたいと思おもいます。

教皇様きやうこうさまは、「信仰しんこうと愛あいが希望きぼうに歩あゆみを教おしえ、希望きぼうが信仰しんこうと愛あいを引ひっぱって行くのです」と記しるされます。勇気ゆうきを持もつてともに歩あゆみ続つづけましょう。